

倭の五王と朝鮮

高 寛 敏

はじめに

『宋書』によれば、永初2年(421)から⁽¹⁾昇明2年(478)にかけて⁽²⁾、五人の倭王が江南の宋朝に遣使しており、その総数は10回に達している。これは倭王権の伸長を前提とする新しい動きであるが、倭王が自称した称号からみても、それは朝鮮情勢と深く関わるものであったことが確かである。

倭王の通宋の対外的意義については、一般に倭の南朝鮮支配を前提として考察されてきたが、1979年の中原高句麗碑の発見によって、それらの旧説は再検討を余儀なくされた。南朝鮮の諸国家が政治的支配を受けていたとするなら、それは倭による支配ではなく、高句麗による支配といわなければならないことが明らかになった

からである。

中原高句麗碑の発見は、倭の五王の研究にも転機をもたらしたわけであるが、既に山尾幸久・鈴木靖民・鈴木英夫氏らの有益な新見解が提示されている。ここでは、坂元義種氏による基礎研究を参考にしながら、これらの新説について吟味し、改めて倭の通宋の対外的意義について考察することにした。

1. 讚による通宋の開始

讚は永初2年(421)・元嘉2年(425)・元嘉7年(430)⁽³⁾に遣使して、「安東將軍・倭国王」に冊封されている。この讚による通宋の開始は、なにを契機とし、またどのような目的をもっていかである。

この点について鈴木靖民氏は、中原高句麗碑

(1)『晋書』安帝紀義熙9年(413)条に、「是歲、高句麗・倭国及西南夷銅頭大師、並獻方物」とあるのによると、これより以前に倭王が東晋に遣使していることになるが、これは高句麗が仕組んだ政略的な使で、倭王の遣使という事実はない。坂元義種『倭の五王』教育社、1981年、34～73ページ参照。

(2)『南齊書』・『梁書』にみえる、建元元年(479)・天監元年(502)の武への進号は、新王朝樹立を祝賀する形式的なもので、武の遣使があったわけではない。坂元義種「倭の五王」(同『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館、1978年)参照。

(3)元嘉7年については、『宋書』本紀に「元嘉7年正月、是月、倭国王遣使献方物」とあるだけなので、倭王がだれであるかは明瞭でないが、珍の除正が元嘉15

年(438)であるから、元嘉7年の遣使は讚によると考えるのが穏当である(坂元義種、注(2)書、124～146ページ参照)。原島礼二「倭の五王の在位年代と名」(古代を考える会編『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』記念論集刊行会、1983年)は、『宋書』は「除授以前の王の貢献については、しばしば伝でことわることなく本紀にだけ記事をのせた」とし、元嘉7年の倭王を珍、大明4年(460)の倭王を興とする。しかし倭国伝には「世祖大明6年(462)詔曰、倭王世子興……新嗣辺業」とあるので、これが興の最初の遣使記事であり、大明4年はやはり済によるものと考えられる。原島説には前提条件がいくつかあるが、やはりその前提条件に問題があると考えられ、そこから出発した元嘉7年珍説も再検討の余地があろう。

によって明らかなように、421年頃、高句麗は新羅を臣従関係におきつつ、厳しくその軍事組織化を進めていたが、「この危機的な外圧のもと、百済の勧めによって倭の対宋外交が開始された」とし、425・430年の通宋も、「百済と共同歩調をとった可能性が強い」と指摘した⁽⁴⁾。この鈴木説は旧説を打破する刮目すべき新見解で、継承すべき基本視点と考えられる。

鈴木説を受けながらも、山尾幸久氏の考えは少し異なるようである。即ち、山尾氏は、「石上神宮七支刀銘・高句麗広開土王碑銘が語る事実、百済王と倭王との親密な関係、この両王権の高句麗との対立関係、この両方が始まったことである。ヤマトの対高句麗関係は、百済の場合とはちがう。ヤマトの場合は、5世紀初頭以来新羅に進駐している高句麗軍、南加羅を帰属させて以来伽耶南部に影響を与えている高句麗との関係である」。「421年の倭王の遣使は、新王朝樹立の機をとらえて、百済王権の勧めによって、伽耶における対高句麗関係の打開を期待して始まったといえよう」と述べ⁽⁵⁾、「百済王権の勧め」によって始まったが、「ヤマトの場合は、百済の場合とはちがう」ともいい、倭の独自の立場をも強調する。

両説は、讃の通宋が高句麗の新羅・任那（任那加羅）進出に対抗するものであること、そしてそれは百済が勧めたことが契機となっているということで一致しているが、その点については承認されて然るべきであろう。ただ、5世紀前半頃の政治情勢については、両説といくらか

異なる分析が可能と考えられるので、次にその点について述べながら、両説の相違についても検討してみたい。

まず第一に、高句麗の新羅・任那への軍事的進出は、400年から始まり、481年に終わったことである。『広開土王碑文』永樂10年条によれば、400年、新羅救援に向かった高句麗軍は、倭軍を討って新羅城・男居城・任那加羅從拔城を占領し、そこに高句麗軍を駐留させた⁽⁶⁾。それ以来、高句麗による新羅の軍事組織化が始まったばかりでなく、やがて高句麗は竹嶺越えと東海岸伝いに新羅領を蚕食し、遂には迎日郡北部にまで至ったのである。この高句麗による一部新羅領の併呑は、主に高句麗が後援した訥祗麻立干代（417～458）のことに属する⁽⁷⁾。鈴木氏は、429年の百済王権の分裂と親新羅派の台頭ということを推測するが⁽⁸⁾、百済王権は429年に腆支王から毗有王に順調に継承されており⁽⁹⁾、430年以後の百済・新羅同盟を示唆する『三国史記』の一連の記事は、原史料の根拠が薄弱である。新羅が嶺南の高句麗軍を最終的に駆逐したのは481年であり、それまで新羅は高句麗に臣属しながら、高句麗の南方戦略の一翼を担っていたのであるから、百済・倭両国とは一貫して敵対関係にあったのである⁽¹⁰⁾。

第二に、480年頃までの高句麗の南方戦略は、百済を主敵としながらも、一方では主に新羅軍を動員して任那を攻略することになった。任那攻略は百済を背後から脅すことになるばかりでなく、なによりも百済を倭から切り離すことに

(4) 鈴木靖民「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』、東京大学出版会、1984年）

(5) 山尾幸久『古代の日朝関係』塙書房、1989年、215～216ページ

(6) 拙稿「永樂10年、高句麗広開土王の新羅救援戦について」（『朝鮮史研究会論文集』27、1990年）

(7) 拙稿「『三国史記』新羅本紀の国内原典（上）」（『古代文化』1994-9）

(8) 鈴木靖民、注（4）論文

(9) 拙稿「『日本書紀』所引、『百済記』と『百済新撰』に関する研究」（『朝鮮大学校学報』（日文化版）1、1994年）

(10) 以上は拙稿、注（7）。

なるからである。したがって、それに対抗する百済の戦略は、正面からの高句麗の攻勢に対処する一方、任那・倭との軍事同盟を固めること、特に任那を救援することにあった。倭としても、任那の滅亡は自国の完全なる孤立を意味するだけでなく、やがては高句麗・新羅連合の軍事力が自国に及ぶ可能性を意味するものであった。そもそも倭が399年に任那より新羅に攻め入ったのは、百済が滅亡すれば、高句麗・新羅の軍事力が次には自国に及ぶという危機感からであったと考えられるのである⁽¹¹⁾。任那の滅亡は、鉄資源の供給が杜絶するというだけでなく、倭国自身の存亡に関わる問題と認識されていたのであろう。「ヤマトの場合は、百済の場合とはちがう」とは必ずしもいえないのであって、任那救援は百済にとっても倭にとっても、ひとしく死活問題として把握され、共通の戦略的課題となっていたと思われるのである。後述するような、百済・倭共同の任那救援過程は、そのことを実証しているのである。

5世紀前半、百済と倭の外交上の立場と利害は完全に一致していたといっていよい。そればかりか、百済腆支王（405～429）は太子時代の397年、渡倭して倭兵の導入に初めて成功し、405年に帰国・即位した、倭とは特別な関係のある人物であった。『三国史記』百済本紀には、腆支王5年（409）条に「倭国遣使送夜明珠、王優礼待之」、同14年（418）夏条に、「遣使倭国、送白綿十匹」と異例の記事があって、腆支王と倭のその後の親密な交流を伝えており、後述のように、それはやがて両国の婚姻と共同の軍事

行動へと発展していったのである。倭国との同盟を特に重視し、そのために努力した腆支王が、その同盟強化の一環として、倭王讃に通宋を勧めたことはほとんど確実であり、かくして讃の通宋が421年に始まったのである。

讃による二回目の425年の遣使も、やはり腆支王の意図が反映されていると考えられる。この時、讃は「司馬曹達」を遣わして奉表し、方物を献じているが、この使者は「司馬」の「曹達」という人物なのである。「司馬」は、421年に倭国王讃が宋朝から「安東將軍」に除授されたことによって設置された將軍府の「司馬」で、府主である讃の次席の僚属である⁽¹²⁾。倭王が府官を派遣したことが確実なのはこの一例だけであるが、そこにはやはり特殊な事情があったとしなければならない。

ここで注目されるのは、確実な百済王の府官派遣の例は、腆支王（映）が424年に長史の張威を派遣したのを嚆矢とすることである。長史は府官の主席であるが、後にも百済王が南北朝に使節を派遣する時には、長史をその長官に任命するのを通例としていた⁽¹³⁾。この424年と425年の百済王と倭王の相つぐ府官の派遣は、決して偶然とは考えられないであろう。

曹達をその名からして、倭人ではなく、中国系人士とし、宋から安東將軍府に讃の府官として派遣された人物とみる見解もある⁽¹⁴⁾が、そのようなことは一般に考えがたい。もし特例として宋が派遣したなら、『宋書』に必ず記録があるはずであるが、そのような記録もなく、また倭国伝の「讃又遣司馬曹達」という表現もそ

(11)拙稿、注（6）。

(12)坂元義種、注（1）書、106～110ページ

(13)百済王が南北朝に派遣した府官の例をあげると、424年の長史張威（『宋書』）、450年の私假台使馮野夫（『宋書』）、472年の長史餘礼・司馬張茂（『魏書』）、490

年の長史高達・司馬楊茂・參軍会邁（『南齊書』）、495年の長史慕遺・司馬王茂・參軍張塞（『南齊書』）である。このうち餘礼を除く人物は中国系人士の可能性はある。

(14)山尾幸久、注（5）書、223ページ

れを否定している。

曹達が倭人でもなく、宋から派遣された人物でもないとなると、百済王が倭に派遣した人物である可能性が強いことになる。もともと百済王の府官には中国系人士らしきものが大部分を占めていたのである。即ち、腆支王は424年に府官の長史を初めて宋に派遣したのにもない、司馬の曹達を倭に派遣し、讃にも府官を設置して遣使することを勧めたのであろうが、倭国の準備不足ということもあって、結局、曹達が讃の司馬として派遣されたということが考えられるのである。425年の讃の遣使が424年の腆支王の長史派遣につぐものであったこと、そして讃の使者が長史ではなく、司馬であったことを考えると、そう解釈するのが最も自然であろうと思われるのである⁽¹⁵⁾。

百済が主導したこの時の使節派遣は、倭との一層の緊密化を計った、腆支王の布石であったと推測される。『日本書紀』応神紀39年春2月条に、「百済直支王（腆支王）、遣其妹新齊都媛以令仕。爰新齊都媛、率七婦女、而来歸焉」とあるのは、それを示唆する。この記事は、「百済記」の記事を干支二運くり上げて本文化したもので、それは428年のことである。毗有王紀2年（実は腆支王代である）（428）春2月条、「倭国使至、従者五十人」はそれに対応する記事で、倭国からの使者派遣を受けて、百済から新齊都媛が派遣されたのである。この時の倭国使は職麻那々加比跪であった⁽¹⁶⁾が、その任務は、新齊都媛護衛と任那情勢に関する協議にあっ

たらしい。神功紀49年春3月条は、百済将木羅斤資と倭将沙々奴跪が429年に任那に出兵し、新羅とたたかって一定の成果をあげたという「百済記」の記事を、干支三運くり上げながら潤色を施したものである⁽¹⁷⁾が、それは前年の婚姻に続く一連の動きであったのである。即ち、427年の高句麗の平壤遷都という事態に敏感に対応して、両国は婚姻を結び、さらに任那への共同出兵を行なって、その結果を一層鞏固なものに作りあげたのであった。

429年にはまた動きがあった。雄略紀2年秋7月条分注に、「百済新撰云、己巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿礼奴跪、来索女郎。百済莊飾慕尼夫人女、曰適稽女郎。貢進於天皇」とあるが、この「百済新撰」引用文の「蓋鹵王」は、「百済新撰」の「比有王」（毗有王）を本文完成者（付注者）が改変したものである⁽¹⁸⁾。「百済新撰」によれば、己巳年（429）に毗有王が即位するや、倭王は改めて婚姻を求めて阿礼奴跪を派遣したが、毗有王はそれに応じて適稽女郎を倭に派遣したのである。これは同年の共同の軍事行動の成果をさらに固めるためのものと推測されるが、430年の毗有王（餘毗）と讃の遣使は、やはりその一環として、対宋外交でも歩調を合わせたものと考えられるであろう⁽¹⁹⁾。

以上のように、讃の対宋外交は、高句麗南進の脅威にさらされた百済・倭両国が、使節の往来、婚姻と共同の軍事行動などを通じて、高句麗広開土王代以後の同盟関係を一層強化するなかで行なわれた。したがって、讃の通宋は、東

(15)坂元義種、注（1）書（122～123ページ）は、讃が長史でなく司馬を派遣したことについて、特に「倭国の積極的な外交姿勢」や「軍事的意味」を強調するが、適切な解釈とは思われない。

(16)拙稿、注（9）

(17)山尾幸久『日本古代王権形成史論』岩波書店、1983年、200～210ページ。拙稿、注（9）。山尾氏は、この

時の軍事行動が大加羅で行なわれたとするが、その点は従えない。

(18)拙稿、注（9）

(19)もし元嘉7年の倭王が珍なら、この時の婚姻は、おのおの新しく即位した毗有王と珍との間でとり交されたことになる。

アジア世界への登場という倭王権の願望もさることながら、なによりも百済・倭同盟強化の一環として開始され、続けられたのである。それを主導したのは百済王権であって、倭王権の主体的意志はまだ弱かったといわざるをえない。

2. 珍・済の自称称号

珍は元嘉15年(438)に遣使した際、「使持節、都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王」を自称したが、「安東將軍・倭国王」にだけ除正された。承認されなかったとはいえ、珍が都督六国諸軍事を自称し、その六国のなかに「百済」をはじめ朝鮮国名が多くみえるのは、やはり重要な問題である。

珍の自称称号の意味を考えるに当っては、やはり438年という時期に注目する必要があるが、その点で参考になるのは、百済蓋鹵王(餘慶)が延興2年(472)に初めて北魏に遣使し、高句麗討伐を訴えた際の上表文の内容である。『魏書』百済国伝に著録されたその上表文には、「醜類漸盛、遂見陵逼、構怨三十余載、財殫力竭、転自辱駟」の文言があり、これによると、蓋鹵王は「醜類」(高句麗)に攻撃されて困窮すること30余年に及ぶと訴えているのである。そうすると、高句麗の大攻勢はまさしく珍の遣使時頃に始まり、遂には475年の漢城陥落にまで至ったのである。珍の自称称号はこのような情勢と無関係ではありえないのである。

蓋鹵王の上表文について触れながら、鈴木靖民氏は、「倭の百済を介しての朝鮮への関与の目的は、第一義的に百済との友好関係を維持す

るために、その倭兵導入策に応じ、高句麗に対抗することにあったといえる。対宋外交で倭王が百済の軍事権を唱えたのもその裏付けを求めたものである」と指摘した⁽²⁰⁾が、継承すべき基本的視点と考えられる。

これに対し、鈴木英夫氏はまた異なる見解を提示している⁽²¹⁾。氏によれば、珍自称の都督管区内の朝鮮諸国は、実際には「高句麗の急激な南下によって、その支配下に入った地域・勢力を指し」、倭王がこれらの軍権を要請したのは、「該当地域に現実に影響を及ぼしている高句麗の行動を宋朝の権威をもって否定する」ため、あるいは「倭王の念頭には倭軍が反高句麗諸勢力の中枢として高句麗軍と鋒を交える事態が想定されており、その際に宋朝からの支持、つまり倭の軍事行動の正当性の承認を得ようと狙った」ためなのである。この斬新な新説には示唆されるところもあるが、疑問点も少なくない。

珍の頃には百済・任那は独立国として、高句麗と鋭く対立していたのであるから、それを高句麗の支配・影響を受けた地域として、新羅などと一括するのは無理であろう。また少なくとも珍の頃には、「反高句麗勢力の中枢」は明らかに百済であって、倭は客観的には百済の補助的勢力の位置にとどまっていた。珍の念頭に「反高句麗勢力の中枢」としての意識があったとは、極めて疑わしいことである。

珍自称の都督管区が、旧説の説くように倭の支配地でもなく、また鈴木英夫説の説くように高句麗の支配地でもないなら、ここは鈴木靖民説を一步進めて、百済が対高句麗戦を遂行する際に倭兵の導入を期待した地域とみることがで

(20)鈴木靖民、注(4)論文

年)

(21)鈴木英夫「倭国の統合と朝鮮」(『日本学』6、1985

きる。それはあたかも広開土王代の事態を予測してのことである。その時、百済・任那と同盟した倭は、新羅・任那・帯方の地で高句麗とたたかった。430年代末の情勢はその時の高句麗の大攻勢を彷彿させたのであって、一旦緩急あらば、それらの地に倭兵が入り、百済とともにたたかうことが期待されたのである。つまり、珍の自称称号には百済の期待がこめられていたのである。

このことを傍証する二つの事実がある。その第一は、珍自称の都督管区に「秦韓」・「慕韓」の名があることである。

この「秦韓」(辰韓)・「慕韓」(馬韓)は、5世紀代に朝鮮半島に存在したという文献的明証はなにひとつない⁽²²⁾。さりとて、これだけを切り離して日本列島に存在した勢力とみるのも不自然である。そこで次のような推測が可能と思われる。

百済は広開土王代に漢水以北の多くの領土を失なった。百済にとって、それはいつかは回復すべき旧領であり、そのためには高句麗と一戦を交うべき戦場の地でもあった。その機会がくれば、404年の倭兵による帯方侵入事件の場合と同じく、漢水以北に倭兵を導入する事態も予想されたのである。ところで、この漢水以北は当時は高句麗領であったから、「百済」の名にその地を含ませることはできなかった。そこで

考え出されたのが旧馬韓の名であったということになる。「慕韓」とは、高句麗によって奪取された漢水以北の、旧馬韓―旧百済の地を指しており、「慕」字には旧領にたいする百済の思いがこめられていると考えられるのである。

それでは「秦韓」はどうであろうか。これについては、438年当時、高句麗による嶺南一部地方の領域化が着々と進んでいたことを想起する必要がある。これはなによりも新羅の危機ではあったが、そのような高句麗の領土拡大政策は百済にとっても新たな脅威となり、その地での対決をも予想させたに違いない。その高句麗が新たに領域化した旧辰韓―旧新羅領こそ、「秦韓」の実体といわなければならない。「秦」字は『三国志』辰韓伝の「其耆老伝世、自言古之亡人、避秦役、来適韓国」などを意識したものであろう。

「秦韓」・「慕韓」の実体をこのように解釈すると、都督管区に「弁韓」の名がないことも説明がつく。なぜなら当時、高句麗はまだ旧弁韓―加耶地域の領域化を進めていなかったからである。そして珍自称の都督管区に「任那」以外の加耶諸国の名がみえないのは、当時の高句麗の戦略が加耶地方では任那に集中しており、他の加耶諸国にはまだ向けられていなかったことをも示唆しているのである。

「秦韓」・「慕韓」を高句麗との対決地として

(22)東潮「前方後円墳がなぜ韓国にも存在するのか？」

(文芸春秋編『幻の加耶と古代日本』文芸春秋社、1994年)は、5世紀の大型甕棺墳が分布する全羅南道の柴山江流域を慕韓とするが、それは早急な結論であろう。慕韓が自立的な政治的勢力であるなら秦韓もそうでなければならないが、そのような秦韓の存在を証明することは不可能と思われるからである。4世紀後半以後、百済・任那・倭は強い同盟関係にあったことからして、それまでに全羅南道も百済領域化していたとみるのが常識的であり、柴山江流域の大型甕棺墳は保守的な葬制の残存形態と解釈されるべきであろう。東

氏は継体紀6年(512)条の「任那四県割譲」記事をもって、百済の柴山江流域支配の開始とみるが、その「四県」名は「百済本紀」に典拠をもつとも考えられず、またそれが柴山江流域であるとの確たる証拠があるとも考えられない。これについては、機会をみて議論したいと思う。なお全羅南道や慶尚南道固城郡でいくつかの前方後円墳が確認されており、この地方と倭国との特殊な交流を示唆しているが、それはそれで別の問題として、これから考究される問題であり、それが直ちに慕韓の存在を傍証するものとはならない。

問題にするのは百済王であって、倭王ではなからう。倭王は、高句麗の南下により、やむをえず高句麗と対決したのであり、それは決して望ましいことではなかった。倭王が「秦韓」・「慕韓」の地で高句麗と対決しようなどと望んだはずはなく、どだい、「秦韓」・「慕韓」などという名を考え付くはずもなかったといわなければならない。それは百済王の意向を反映したものとしか、解釈のしようがないのである。

第二に、451年に済が「使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍」を加号・進号されたことである。それは元嘉20年(443)・元嘉28年(451)・大明4年(460)の三度にわたる済の遣使の第2回目のことである。この済の除正称号と珍の自称称号を比較すると、済の称号には「百済」がないかわりに「加羅」が加わっていることが注意される。「百済」がないのは、武の場合でも自称称号からそれは削除されているから、済が自称したにもかかわらず、宋朝の一貫した姿勢によってそれは削除されたことがわかる。「加羅」が加わっているのは、済が「加羅」を含める都督七国諸軍事を自称したからであろう。

済が「加羅」を含めた都督七国諸軍事を自称した点については、神功紀62年条分注所引「百済記」の記事によって、442年に倭王権が沙至比跪を派遣して、独自に加羅に支配権を樹立しようとしたことを反映している、とみる見解もある⁽²³⁾。しかしこの頃、任那や安羅、その他の加耶諸国も独立国として存在していたから、倭王権がそれらの国をとび越えて、独自に加羅に出兵するなどとは、全く非現実的なことである。沙至比跪に関する「百済記」の記事は、

「百済記」編者の造作とみるのが穏当である⁽²⁴⁾。済が「加羅」を加えた理由は、他のところにあったのである。

『南齊書』加羅国伝によれば、加羅国荷知王は建元元年(479)に遣使し、「輔国將軍・本国王」に除せられている。加羅国王の南齊遣使は蟾津江ルートより南海を経たものと考えられ、この時までには少なくとも蟾津江流域は、加羅王を盟主とする大加羅連盟のなかに結集されていたのである⁽²⁵⁾。5世紀中葉には、加羅は任那にかわる有力国として登場していたといえるであろう。有力化した加羅が高句麗といかなる関係をもつにしろ、百済にとって加羅は対高句麗戦略上、無視できない存在となっていたのである。このように、加羅の台頭という情勢を敏感にとらえ、それをいち早く対高句麗戦略上の一環として把握したのは、百済王権であって、倭王権ではないであろう。済は百済王権の意向を反映して「加羅」を加えたと考えられるのである。

以上のように、珍と済との自称称号には百済王権の意向が反映されていると考えられるが、それでは倭王権自身の意向はどうであったかである。前述のように、高句麗の南下をくいとめるといって、百済と倭の利害は完全に一致しており、倭王の対宋外交は百済との結束を固める政策の一環として遂行された。倭王が六国あるいは七国を管区とする都督諸軍事を自称したのも、その延長上にあった。しかし一方、その自称と除正は、倭王の権威、特に国内的権威を高めるのに大きく寄与したはずである。この外交を通じて、倭王による外交の一元的掌握が進んだだけでなく、珍が倭隋ら13人に將軍号を、

(23) 田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館、1992年、92～100ページ

(24) 拙稿、注(9)

(25) 田中俊明、注(22) 書、70～80、101～118ページ

済が23人に「軍・郡」に除することを願い、承認されたことは、この倭王を頂点とする国内の身分的政治的秩序の形成が著しく促進されたことを意味するからである。珍・済の対宋外交は国内的意義が大きく、その点にこそ、倭王が百済王の勧めに積極的に応じた主な理由があったというべきであろう。

ここで、百済・倭同盟の内実について言及しておく必要がある。というのは、山尾氏によると、珍の自称称号には、珍が百済王を「都督管区」の一属州の州将扱いせん」とする意図がこめられていたとし⁽²⁶⁾、鈴木靖民氏は、現実の関係とは必ずしも一致しないが、倭王には「倭中心での宗主国と属国という上下関係」という認識、あるいは「倭本位の中華意識」が存在したと説いている⁽²⁷⁾からである。両氏によれば、少なくとも倭王には百済を属国視する意識があったことになるが、果してそう断言できるかどうかである。

まず、山尾説が成立するためには、珍と済の自称称号の矛盾を合理的に解釈することが必須であるが、それは果されているとは思えない。

百済は宋朝から一貫して「使持節・都督諸軍事・鎮東大將軍・百済王」に冊封されていた。珍と済の自称称号には「百済」を含む広域の管区をもつ「都督諸軍事」があり、それだけを見れば倭王が優位にたつように見えるが、倭王の自称した「安東大將軍」は百済王の「鎮東大將軍」より下位にあるのである。これは宋制では説明できない矛盾であって⁽²⁸⁾、この矛盾は当時の百済・倭関係の現実に基づいて解釈されなければならない。

既述の私見に基づく、この矛盾は次のよう

に説明される。即ち、百済王はその倭兵導入策に基づき、倭王に「百済」を含む「都督諸軍事」を勧めたが、両国間の実際については、百済王の「鎮東大將軍」と倭王の「安東大將軍」とで、その上下を明示したのである。『宋書』本紀は、諸国王の官号を將軍号で代表させていることからみても、地位を示すのはなによりも將軍号であったからである⁽²⁹⁾。一方、倭王は、武に至るまで「安東大將軍」を自称していたから、「安東大將軍」で満足であったのであり、百済との同盟関係を維持するうえに、それ以上のものは望まなかったのである。百済王の「鎮東大將軍」と倭王の自称「安東大將軍」は、百済王と倭王の相対的地位を示す唯一の当代史料といえるべきなのである。

鈴木靖民氏が、倭王には百済を属国視する意識があったとするのは、腆支王と東城王が倭国に滞留した後、帰国して即位した事情による。それを倭王が百済王を冊封したように表現したのは『日本書紀』であるが、それは大部分原史料にない編者の潤文である。さらに原史料といえども、天皇の臣下たる原史料提供者の後世の立場がその表現には反映されているのであるから、『日本書紀』の文章表現を借りて、5世紀当時の百済・倭関係を論ずるのは、方法論的に問題がある⁽³⁰⁾。

もちろん、同様の表現は『三国史記』にもある。阿莘王紀6年(397)夏5月条に、「王与倭国結好、以太子腆支為質」とあり、腆支は「質」として倭国に派遣されたとあるのがそれであるが、この点については次のように考えられる。つまり、『三国史記』百済本紀には倭への納質を伝えたもう一つの記事がある。それは義慈王

(26)山尾幸久、注(17)書、310ページ

(27)鈴木靖民「倭の五王」(佐伯有清編『雄略天皇とその時代』吉川弘文館、1988年)

(28)坂元義種、注(1)書、225～230ページ

(29)坂元義種、「5世紀の日本と朝鮮」(同、注(2)書)

(30)拙稿、注(9)

後期の「迎古王子扶餘豊當質於倭国者、立之為王」とある扶餘豊のことである。一方、『三国史記』編纂当時、扶餘豊らの百済遺民の闘いを伝えた百済史料は残存しなかったため、編者は『旧唐書』・『新唐書』・『資治通鑑』を参考にしてその部分を執筆したが、それらの中国史書には「故王子扶餘豊」とだけあって「質」の文字はない。新羅本紀の文武王3年5月条にも「迎故王子扶余豊立之」とあるので、「質」のことは新羅史料にもなかった。とすると、豊の「質」は『三国史記』編者の筆になるもので、原史料の根拠がないのである⁽³¹⁾。同様なことは腆支の場合にも考えられるのであって、それは5世紀の史料に基づく表現ではない。

『三国史記』編者が「質」字を加えた理由は、新羅史料に未斯欣「入質」記事（実聖尼師今紀元年3月条）があったので、それとの均衡を計ったことと考えられる。

当代史料の『広開土王碑文』永樂9年己亥条、「百済違誓与倭和通」によれば、腆支は「和通」使として派遣されたということ以上のものではないとしてよい。4世紀後半の『七支刀銘文』は、「百済王世子」が「倭王」に「七支刀」を贈ったことを刻記しているが、この関係は百済王の優位を物語っており、「和通」はその延長線上で果されたものなのである。当代史料の『七支刀銘文』・『広開土王碑文』・『宋書』による限り、百済と倭は同盟関係であったが、百済王の方が倭王より相対的に高い權威を保持していたといえ、少なくとも珍や済の頃に、百済の宗主国であるなどという意識が、倭王に芽生えていたなどとはいえないことである。

百済王はその倭兵導入策に基づき、倭王に

「安東大將軍」として「都督百済諸軍事」をも自称することを勧めたと考えられるが、それでは宋朝はなぜ一貫してそれを拒否したかということである。

これについては、宋朝が「最強の敵国北魏を締めつける国際的封鎖連環のなかに百済をがちりとはめこんで、その弱体化を認めまい」とした点に、その理由を求める見解が有力である⁽³²⁾。それはそれで否定する必要はないが、やはりより本来的には、「都督百済諸軍事」が「鎮東大將軍・百済王」のもので、「安東大將軍・倭国王」のものでないことが余りにも明白であり、倭国王の地位にもふさわしくない、とされたのが主な理由であろう。

3. 武の上表文

大明6年(432)の興の遣使に続き、武は昇明元年⁽³³⁾(477)と昇明2年(478)に宋朝に遣使した。特に478年の遣使は緊急の情勢に関連したもので、その時に武が宋朝に送った上表文は倭王の対宋外交の意義を考えるうえで重要な史料となる。

武の上表文は前半と後半に分けられるが、前半部の解釈は山尾幸久氏によってほぼ尽くされている⁽³⁴⁾。即ち、その文章は古典の成語・成句を多用し、四字の対句をつらねた華麗な駢麗体で、誇張・文飾が著しい。「東征毛人、五十五国、西服衆夷、六十六国、渡平海北、九十五国」は、「王道融泰、廓土遐畿」（宋の皇帝陛下の徳治はゆきわたり、陛下が支配する土地の境界を遠く広大なものにしました）を具体的に述べようとしたに過ぎず、字義通り客観視するこ

(31)拙稿「〈任那〉の滅亡と〈任那の調〉」(『東アジア研究』7、1994年)

(32)坂元義種、注(1)書、179ページ

(33)昇明元年の遣使が武によるものであることについては、山尾幸久、注(17)書、295～296ページ参照

(34)山尾幸久、注(5)書、223～226ページ

とはできない。武が祖先の軍事的功績を誇張しながら述べた目的は、祖先が皇帝から授けられた「使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」の軍権を、皇帝の忠臣として、皇帝のためによく行使したことをいいたかったのである。

後半で問題となるのは、継続する次の二文である。

〔1〕臣雖下愚、忝胤先緒、驅率所統、歸崇天極、道遙百濟、裝治船舫。而句驪無道、凶欲見吞、掠抄辺隸、虔劉不已。每致稽滯、以失良風、雖曰進路、或通或不。

〔2〕臣亡孝濟、実忿寇讎蹙塞天路、控弦百万、義声感激、方欲大挙、奄喪父兄、使垂成功不獲一簣、居在諒闇、不動兵甲。是以偃息未捷。

二文のうち、時間的に内容が先行するのは〔2〕であるから、〔2〕から検討することにする。

〔2〕の傍線部分によると、武の父の済は寇讎（高句麗）を討つ準備をしていたが急逝し、兄の興も相ついで死去したことになる。そうすると、済が戦争準備を整えようとしたのはその晩年ということになる。済は460年12月に遣使しており、462年には興が即位していたから、済は461年頃に死去したことになる。この頃の済の高句麗征討計画は、461年の蓋鹵王弟昆支の来倭に関係すると考えられる。

蓋鹵王が弟の昆支を倭に派遣したことを伝える雄略紀5年条は、潤色が多く、その記事からは昆支派遣の目的はさだかでないが、それは397年の太子腆支の倭派遣につぐ重大事で、新たな軍事的緊張のためであろうことは容易に推測が

つく。

『三国史記』には腆支王から毗有王代まで、対高句麗関係記事の記載がない。それだけ疏略なのである。蓋鹵王紀にも末年の漢城陷落記事を除くと国内史料がなく、唯一、15年（469）条に「秋八月、遣将侵高句麗南鄙、冬十月、葺双岨城、設大棚於青木嶺、分北漢山城士卒戍之」という、一記事があるだけである。しかし唯一の記事ということからすると、それはかえって460年代の高句麗・百濟戦争が熾烈であったことを示唆しているが、百濟が高句麗に攻撃を加えている内容からすると、百濟が危機的状況に陥っていたともいえない。史料は欠如するものの、昆支渡倭の主要因は任那情勢の悪化にあったのであろう。ただ蓋鹵王は472年に北魏に遣使上表し、北魏に高句麗征討を要請しているから、470年代に入って北部戦線も急激に悪化したことは確かである。

武の上表文〔2〕では、済・興ともに軍事行動を起すことなく、相ついで死去したように記されているが、実は昆支来倭を契機として倭の出兵があったことが確実なようである。雄略紀の対新羅関係記事のなかで、原史料の存在が想定される唯一の記事、9年（465）条の紀小弓らによる新羅攻撃記事と、慈悲麻立干紀6年（463）春3月条の倭人の軟良城（梁山）侵入記事は、互いに相応ずるもので⁽³⁵⁾、460年代前半、倭は任那から梁山方面で軍事行動を展開したと考えられる。それは初め済と昆支の間で計画され、興によって実行されたものに違いない。ただ、この時の軍事行動はとりたてて成果をあげることができず、興の急死などもあって中途半端に終わったといえるであろう。

(35)山尾幸久、注(17)書、229ページ

(36)拙稿『『日本書記』雄略紀の対新羅関係記事』（『大

阪経済法科大学アジア研究所年報』6、1994年）

さて、武は上表文の〔1〕で高句麗の「無道」を訴え、宋の出兵を初めて要請したのであるが、それはまた済・興の頃とは異なる、新たな事態の展開に応じたものである。通説では、「辺隸」を「宋皇帝の辺隸たる百済」の意と解し、〔1〕傍線部分を主に475年の漢城陥落事件のこととするが、上表文には漢城陥落事件自体については一言もないから、それは論者の先入観である恐れがある。

『宋書』順帝紀昇明元年（477）冬11月己酉条に「倭国遣使献方物」、同2年（478）5月戊午条に「倭国王武、遣使献方物、以武為安東大將軍」とある記事から、武は477年5月に遣使し、その使者の帰国前か、または帰国直後において返して遣使上表し、「句驪無道」を訴えたことがわかる。478年の遣使はすこぶる緊急を要していたのである⁽³⁷⁾が、それは478年に突発したのである。したがって、〔1〕傍線部分は漢城陥落事件だけのことではない。それが漢城陥落事件を指すなら、武は少なくとも477年の遣使時にそれを訴えていたはずである。

「辺隸」の解釈に新説を提起したのは奥田尚氏と鈴木英夫氏である。奥田氏は、「見吞」の「見」を受身として、傍線部分を「高句麗は無道にいつも計画しねらっているので、倭は高句麗に併吞されそうである」と解釈した。氏によれば、「辺隸」は「宋朝の辺隸たる倭」のことであり、武の上表文は「高句麗に直接被害を受け併吞されそうな倭国の窮状を訴える」のを主眼としていたのである⁽³⁸⁾。奥田説は、「見」を受身とするなど、文章解釈自体には難点があるが、「辺隸」の一般的意味からすると、それは「倭」でもありうることを指摘した点、また478

年に起った緊急事という観点からすると、全体的にも継承すべき内容を含んでいるといえる。

一方、鈴木英夫氏は『中原高句麗碑文』を参考にして、「句驪無道」の具体的意味は、高句麗が新羅・加耶地域を占領したことを指すとし、「辺隸」の内実を「新羅や加耶をも含む高句麗の勢力が浸透した地域」と考える⁽³⁹⁾。鈴木説は確かに継承すべき視点を備えているが、478年の緊急事という点の説明が充分でなく、奥田説への配慮も不足していると思われる。

「辺隸」の一般的意味としては、「倭」を排除するいわれはなく、武の上表文「封国偏遠、作藩干外」と自国について述べていることや、世祖大明6年の興への詔に「新嗣辺業」とあることからすると、「辺隸」には「倭」が含まれているとみるのが自然であろう。武が「宋皇帝の辺隸」という時、それは端的にいて、武が自称した都督諸軍事の管区、即ち「倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓」を指すといってよい。これらの諸地域はひとしく高句麗によって「見吞」されたか、またはその標的の下にあった。これらの諸地域には実際に「掠抄」されているものも、まだそうとはいえない地域もあるが、一部でも「掠抄」されているなら、「辺隸」は一体として「掠抄」されていると表現しえ、武が都督七国諸軍事を自称する以上、むしろそう表現するのが当然であろう。

武は「辺隸」の危機（武は他のところで、これを「方難」とも表現している）を訴えたのであるが、478年の緊急事ということを考慮すると、その危機とは、高句麗による百済の漢城陥落や新羅の臣属というだけでなく、それに続く、倭によってより重大な、高句麗の脅威を直接に

(37)山尾幸久、注(17)書、295～296ページ

(38)奥田尚「“倭の五王”の“倭”について」(『追手門学院大学文学部紀要』16、1982年

(39)鈴木英夫「加耶・百済と倭」(『朝鮮史研究会論文集』24、1987年

ひしひしと感ずる事態が発生したといわなければならない。武が宋の出兵を要請したのを、百済だけのためにというのはもともと理に合わず、それはなにより倭自身のためなのである。

478年初頃になにが起ったかについては明証がない。しかし、5世紀の情勢の流れを考えると、それは任那の危機であつたろうことは推測に難くない。漢城陥落につぐ任那の危機は、高句麗の軍勢力が遂には倭に及びうという恐怖感を与えたのであって、事は広開土王代以上に切迫していたのである。

この時、倭王権は百済の軍勢力をあてにすることはできなかった。武が自らを「開府儀同三司」に仮したのも、このことと関係がある。即ち、「安東大將軍」たる倭王は、「鎮東大將軍」たる百済王の力を頼らずに、「開府儀同三司」の高句麗王の脅威から、独自に任那と倭を防御しなければならなかった、ということになる。

しかし、この危機は間もなく鎮静したようにみえる。高句麗の支配下にあった新羅は、この頃、反高句麗闘争を着々と準備しつつあり、任那攻撃はその意になつたのである。やがて新羅は加羅と秘密裡に同盟を結んで一挙に攻勢に撃って出、481年に嶺南の地から高句麗勢力を逐出することに成功した。ここに任那と倭は、広開土王代以来の危機から脱することになったのである。

倭王が478年の遣使をもって江南王朝との通交を断った点については、今までいろんな議論があつた。それは国内的な要因もあつたとはいへ、481年の情勢の新展開と関係することを指摘したのは鈴木英夫氏であるが⁽⁴⁰⁾、それは妥当な見解である。この時を境に、倭にとって高

句麗の直接の脅威は消滅し、また百済の倭兵導入策も一段落したのである。481年以後、百済は新羅と婚姻・軍事同盟を結んで高句麗と対抗したので、対江南外交に倭を勧誘することもなかったのである。倭の通交中止を、北魏の強大化による交通の困難さをあげる考えもあるが⁽⁴¹⁾、もちろんそれは一条件として存在はすれ、百済が江南王朝にひき続いて遣使したことを考えれば、それは本質的な要因とはいえない。481年の朝鮮半島情勢の急変こそ、その中止理由として最も重視されるべきであろう。

おわりに

421年から478年の間、10回にわたる倭王の対宋外交は、倭王の王権強化策とも関連するが、より一義的には高句麗南下に対処する、百済・倭同盟の発現として遂行された。倭王の通宋を導いたのは、宋初から「使持節・都督百済諸軍事・鎮東大將軍・百済王」に封冊されていた百済王であつたが、倭王の通宋には、情勢の動きによる内容的変化もあつた。それはおよそ3期に分けることができよう。

第1期は讃による通宋の開始期である。讃の3回にわたる遣使は、高句麗に対抗して、広開土王代以後の百済・倭同盟強化の一環として、百済王が勧めたものと解される。

第2期は438年、珍が「使持節・都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、倭国王」を自称した時から、477年の武の第1回目の遣使までである。この時期は、激化する高句麗の攻撃に対応して、百済王が危急の場合には南朝鮮各地に倭兵を導入しようと計つたこと、

(40)拙稿、注(7)、

(41)鈴木英夫、注(21)論文。ただし、新羅の高句麗勢力逐出を481年とする点については、論証がなされて

いるとはいえない。

(42)川本芳昭「4、5世紀の中国と朝鮮・日本」(『新版古代の日本』2、角川書店、1992年

一方、倭王はそれに同調しながら王権の強化を計ったことが特徴的である。そして百済・倭同盟の重要連結点となる任那の情勢が悪化した460年前半には、百済との協議の下に、倭の任那出兵が実際に敢行されたと思われる。

第3期は、478年の武の第2回目の遣使の時である。この時、百済は既に大打撃を受けており、倭王権は百済王権を頼らずに、独自に任那を救援しなければならなかった。武が「開府儀

同三司」を自称したのは、ここにその理由があった。

東アジアの5世紀史は高句麗を軸にして動いていた。一方、反高句麗勢力の中核は百済であった。5世紀の倭国史は、高句麗や百済の動きに連動して、その国際的な渦の中にあった。倭王の通宋の意義も、高句麗と百済の動向を中心視座にすえてこそ、より適確な解明が可能であろうと考えられるのである。

